宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

宮崎らしい表現・創作ダンスを探る：表現・創作ダンスからフォークダンス(民踊を含む)へのアプローチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2008-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, るみ子, 有馬, 早苗, 藤川, 秋子, Arima, Sanae, Fujikawa, Akiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/1401

宮崎大学教育文化学部紀要　芸術・保健体育・家政・技術　第４号（2000）39－53頁

宮崎らしい表現・創作ダンスを探る

－表現・創作ダンスからフォークダンス（民踊を含む）へのアプローチ－

高橋るみ子・有馬早苗*・藤川秋子**

An Investigation of the Distinctive Expression and Creative Dance on the Miyazaki

－Expression and Creative Dance Approach Folkdance(Unique Local Folkdance Included)－

Rnmiko TAKAHASHI, Sanae ARIMA, Akiko FUZIKAWA

１．はじめに

平成13年度に宮崎市で開催する「全国学校体育研究発表大会」を１年後に控えた今、大会関係者より、公開演技（宮崎らしい表現・ダンス）の立案と間接的な指導を依頼された。また公開演技に参加する（あるいは希望する）園や学校も、そろそろ次年度を見通した具体的な保育や授業づくりに取りかかる時期でもある。すでにこれまでの４年間（1996年～現在）、この公開演技を想定し、５名の共同研究者（有馬、岩田、佐々木、中間、藤川）と共に、また宮崎県女子体育連盟研究部の協力を得て、宮崎の芸能を題材にした表現・創作ダンスの実践的かつ実証的研究を続けてきた(＊１)。またこれらの研究成果を広く県内の指導者に報告し、この「創作」を“伝承”と創造”に向かう両ベクトルの出発点に位置づけた「郷土芸能を題材にした表現・創作ダンス」への理解を求めてきた。その結果、県下ではこの芸能を題材にした表現・創作ダンスの長所が

①表現運動・ダンス領域の主内容であり、時代を超えて変わらぬ価値ある表現を体験する「フォークダンス」のオルターナティブな学習になる(＊２)

②教育のスリム化という時代の要請を受け、領域内で、「表現・創作ダンス」か「フォークダンス」か（あるいは「リズム系のダンス」か）といった内容選択が迫られる今、同時に両方の文化に触れさせることができる、結果的に両方の楽しさを体験させることができる学習になる

といった長所が認められ、ぜひ公開演技を通してこの研究成果を全国へ発信して欲しいといった声が聞かれるまでになった。そこで、具体的な立案に取りかかるに前にもう一度、一連の研究の成果(＊３)を振り返り、今回は鑑賞する側からの視点も加え、“宮崎らしい表現・創作ダンス”の特に“宮崎らしさ”について捉え直してみたいと考えた。以下に報告する。

加えて、常々感じてきた表現運動・ダンス領域の内容選択への疑問（なぜ学際的な学問が重視され、学校教育では教科の枠までも取り払おうという時代に、一教科のさらに一領域の中で内容選択なのか。逆にこれからは、内容「表現・創作ダンス」「フォークダンス」「リズムダン

＊聖心ウルスラ短期大学講師　＊＊宮崎女子短期大学助教授

ス・現代的なリズムのダンス」の枠をとり払う“内容の乗り入れ”でよいのではないか。また一生徒に限るならば、内容選択よりも、それぞれの背景にある異なる文化を同時に体験する“内容の乗り入れ”の方が、いろいろなダンスの楽しさに触れるという領域の目標に近いのではないか）についても言及することとする。

2．“宮崎らしい表現・創作ダンス”と郷土芸能

県内の芸能の学習材としての可能性を探ることが、なぜ“宮崎らしい表現・創作ダンス”や全国大会での公開演技につながるのか。これまでの研究成果を総括する前に、郷土芸能を題材にした表現・創作ダンスを提案するに至った経緯を記す。

宮崎で表現学習（幼児の「表現」、小学校低学年の「模倣」、中学年・高学年の「表現運動」、中学校・高等学校の「ダンス」）の保育・授業づくりに関わって既に10数年が経過した。当初、公開保育や研究授業等で目にした宮崎の子どもたちの動きは、1978年、1981～83年に実施された松本千代栄氏（当時お茶の水女子大学教授）と宮崎県女子体育連盟との共同研究(＊６)の成果が顕著であり、『子どもと教師とでひらく表現の世界』（松本千代栄、大修館書店、1985）に掲載された写真そのもの、一人ひとりが思い思いに精一杯の力を出しきる表現であった。しかしその後、県内各地で実際に子どもたちの表現学習に関わる中で、宮崎ならではの題材による表現や、宮崎を感じさせる創作ダンスが少ないことに気づいた。例えば、宮崎県は太平洋に面して長い海岸線をもつ。したがって、一言で「海」（あるいは「波」）と言っても、地域によりその様子や感じは大きく異なる。もちろんそれは季節によっても異なるが、概して日向灘の馬ヶ背では、

・荒波が石の柱にぶつかりうねる様子
・逆流した波が新しい波と複雑にぶつかり合う様
・鳥のさえづりも消してしまう怒濤

といった海や波を、また宮崎市の一ツ葉海岸では、

・はるか水平線のかなたから次々次々盛り上がり浜に打ち寄せる波
・背丈を越える波の壁が一気に崩れる様
・穏やか海面下の、実は大人も足をすくわれる引き返しの強さ

といった海や波を、あるいは日南の南郷では

・青緑の海面のあちこちでキラキラ白く輝く小さな波の花
・サーファーを乗せて滑るように走る波
・鮮やかな熱帯魚が行き交う岩場の海

といった海や波を見ることができる。ところが、小学生のイメージ課題「波」の授業を観察・比較すると、日向の児童の「波」と、宮崎市や日南の児童のそれとは大差がない。地域が違っても、子どもたちは「寄せては返す波」「ぶつかって飛び散る波」「渦巻く波」を表現しており、それらは実際に教室の窓から見える海の様子や感じとは大きく異なっていた。

なぜ子どもたちは自分が見ている海や波を表現しないのか。私たちは、住む地域（風土や生活）が違えば、共通の時間を生きていても感じ考えることは異なるはずである。中でも真実を汲み取り自らの表現に結実させる表現学習では、事実に則し事実をよく観察して表現することは創造の端歩であり、自分の周囲の日頃みなれたものの中から“新しいもの”や“美しいもの”

を見い出して表現することが、表現を真実にも個性的にもする(＊４)。したがって幼児や小学校の低学年・中学年では、本当のように表現できるように身近で実際に見たり感じたりできる題材を取り上げる。ところが先の「波」の授業では、“波”が身近で実際に見たり感じたりできる題材でありながら、教師も当たり前のように、専門の書籍や雑誌、ＶＴＲの中の指導言語(「走って跳んで転がる波」「大波」「岩にぶつかって飛び散る波」「渦巻く波」)をそのまま用いた言葉かけを行なっていた。しかし、教師が参考にするこれらの書籍や雑誌、ＶＴＲは全国の指導者を対象にしたものなので、そこで取り上げられている内容は原則的なものやこれだけはといったものである。また表現を引き出すための指導言語も、題材が共通にもつ特徴や様子、感じの言葉が厳選されている。したがってこれらの指導言語を用いれば、一応だれもが精一杯で思い思いの動きを引き出すことはできる。しかし観察した授業の比較でも明らかなように、そこに地域による違い（個性）は観られない。もし一言、“馬ヶ背の波はどんな波”“一ツ葉海岸の波になって動いてみよう”“いつも遊んでいる海を思い出して”といった、自分の周囲をよく観て表現することを促すような言葉かけの工夫があれば、精一杯で思い思いのうねりや逆流、ゆっくりした上下動、一瞬止まってどっと崩れる動き、斜め走りといった、実際に子どもたちが観たことのある、心に残っている「海」や「波」を引き出すことができるはずである。

さらに県内の教師の中には、自身が毎日目にする海や波の“何がどう他の地域のそれと異なるのか”分からない者や、指摘されてはじめて気づく者もいる。他県の出身者には新鮮に感じる馬ヶ背や一ツ葉海岸、そして南郷の景観も、その地域で育ち生活する人々には日常的で当たり前の景色に映るらしく、またその特徴についても、実際に他の地域を見てはじめて気づくものであるらしい。しかしメディアがこれだけ発達した現代である。映像であっても身近なものであっても、真実なものの動きを直観する(＊４)教師の姿勢があれば、子どもたちから、観念的でなく実際に観て感じた表現（地域らしい表現）を引き出すことは可能である。

併せて、観る側に立ち、先の“馬ヶ背の波はどんな波”“一ツ葉海岸の波になって動いてみよう”“いつも遊んでいる海を思い出して”といった言葉かけで引き出された表現性を調べたところ、県内に住んでいても、観る人が必ずしもこれらの表現を“馬ヶ背らしい”“一ツ葉海岸らしい”“南郷らしい”と感じるとは限らないことが分かった。non-verbalな表現が観る人に享受されるには、何らかの共通の地平が必要であり(＊７)、宮崎に住んでいても、日向灘の馬ヶ背や宮崎市の一ツ葉海岸、そして南郷の海を見たことがなければ、あるいは宮崎について予備知識がなければ、子どもたちと観客のコミュニケーションは成立しない。したがって、子どもたちが本当によく観てその通りに動いても、教師が地域らしい指導言語を工夫しても、観客は単なる「波」の多様な表現の一つとしか受け止めず、期待するような地域らしさは伝わらない。

以上を踏まえて、まず宮崎の子どもたちから価値ある表現を引き出すためには、子どもたちの周囲の日頃みなれたもの（地域の自然現象や生活事象）を題材に、まず、子どもたちが本当によく観てその通りに表現できるような指導言語の工夫（すでにその有効性が実証された指導言語に地域の個性をプラスさせる）を提案したい。さらに平成13年度に開催される全国大会（観客に共通の地平を期待できない発表会）で、子どもたちの表現・創作ダンスが少しでも多くの観客に“宮崎らしい”と享受されるには、より多くの人が“宮崎らしい”と感じている宮崎ならではの題材を取り上げることが必要なことを、そしてそのような題材の一つが、誰もが身近でかつ“宮崎らしい”と認める県内の芸能であることを指摘し、そのような芸能を題材に

した表現・創作ダンスの実践を提案することで、子どもたちと観客の両者が“宮崎らしさ”を共有できるような作品発表を目指したい。

3．宮崎の芸能を題材とした表現・創作ダンスの学習

1991年、高千穂の子どもたちの“宮崎らしい表現”を引き出すことを目的に、国の無形民俗文化財の指定を受けている『高千穂夜神楽』（以下、「夜神楽」とする）について、まず、上野地区と下野地区の子どもたちが通う上野小学校の児童および教師にアンケート調査を実施し、併せて自身も夜神楽のホシャである高千穂神社の宮司から聞き取り調査を行った。そして明らかになった夜神楽の実態と入手した文献やＶＴＲ（下野地区の夜神楽や観光神楽）から、夜神楽を題材にした模倣と表現の教材づくりを行った。しかし、当時すでに上野小学校では保存会に依頼する夜神楽の取り組みを止めており、低学年、中学年、高学年のそれぞれを対象に作成した単元学習案は、高千穂の出身でない教師や、伝承ではなく夜神楽の文化的な価値の学習を学校教育に望む伝承者に高く評価されながら、実践までに至らなかった(＊８)。

1997年、この高学年の単元学習案をもとに、新たに大学生（教育学部中学課程保健体育専攻および小学課程保健体育専修）を対象にした教材づくり（夜神楽の特徴のある動きから運動課題を、同じくその由来や歴史からイメージ課題を設定した）を行い、「宮崎らしい作品創作と発表を目的としたダンスの学習」を実施した。ただし題材の夜神楽は、高千穂出身の学生を除く他の学生にとって、地域を広義に捉えれば身近ではあっても実際には観たことのない芸能であったことから、学習資料として、高千穂町教育委員会が作成したＶＴＲや観光者向けのパンフレットを用意し、“宮崎らしい”作品づくりを試みた。なお使用曲については、夜神楽が神事というよりはその年の豊かな実りを感謝し来る年の無事を祈る村祭りであったことや、昔も今も神楽ばやしを聞くだけで地区の人は心が浮き立つといった聞き取り調査の回答を参考に、このような神楽ばやしは現代のラップに通じると解釈し、ラップのリズムに神楽ばやしと神楽せり唄を加えた。また代用が難しい衣装の一部も同協会から借用したが、舞に不可欠な小道具については、高千穂出身の学生を中心に手づくりとした(＊９)。

このような経過を経て創作した作品『千年ぐらいは舞（待）ってみようかー高千穂夜神楽より』の上演に対し、〈表１.〉に示すような様々な評価が寄せられた。以下に、上演の意図や地域で異なる鑑賞者の評価をまとめる。

（表１）作品「千年ぐらいは舞（待）ってみようか」上演一覧

No.	年月	上演地	イベント名称	会場	宮崎らしさ	夜神楽らしさ	神楽らしさ	備考
1	1997.7	神戸市	第10回全国高校大学ダンスフェスティバル	神戸文化ホール	○			
2	1997.8	高岡市	第５回アーティスティック・ムーブメント・イントヤマ	高岡市民会館	○			
3	1997.11	高千穂町	高千穂町立高千穂中学校創立50周年記念式典	高千穂中学校体育館		○（一部の中学生は×）		
4	1998.1	宮崎市	ムーブメント・アート・インみやざき'98	宮崎市民文化ホール	○	○（一部の観客は×）		
5	1998.11	東京都	第14回国際民族舞踊フェスティバル	なかのサンプラザ	○		○	留学生
6	1998.12	宮崎市	平成10年度宮崎県留学生弁論大会	宮崎公立大学ホール	○		○	留学生
7	1999.5	福岡市	博多どんたく'99	どんたく会場	○		○	屋外特設舞台および路上パフォーマンス
8	1999.5	宮崎市	宮崎大学創立50周年記念式典	大学会館			○	留学生
9	1999.9	高千穂町	"天孫降臨"'99	高千穂町立武道館		○		特設舞台
10	1999.10	別府市	別府ドリームバル'99	別府中央公園	○	○		屋外特設舞台および路上パフォーマンス

(1)県外の上演に対して

神戸のダンスフェスティバルでは、「宮崎らしい」「宮崎の学生にしかできないダンスだ」といった評価と併せて、「これは"夜神楽"ではない」「"神楽"の神聖さがない」と評価され、続いて発表した高岡のＡＲＴ．Ｍ（1997.9)では、「宮崎の学生らしい」「明るい」と評価された。

また東京で開催された国際民族舞踊フェスティバル（1997.11)では、踊り手の半数が留学生（フィリピン、タイ、ダンザニア他）であったにもかかわらず、多くの観客から、「宮崎のイメージにぴったりだ」「(宮崎はよく知らないが）他の発表（『七尾まだら』『群上盆おどり』『牛深ハイヤ』）と違う」といった感想が寄せられた(*10)。

(2)県内の上演に対して

宮崎市で開催されたムーブメント・アート・インみやざき（1998.1）では、県内の芸能に詳しい観客からは、「高千穂の"夜神楽"のにぎにぎしい感じが出ていた」「(高千穂の人々の価値観の変化に合わせて変様してきた）"夜神楽"らしい」といった感想が、逆に実際に夜神楽を観たことがない観客からは、「自分が想像していた"夜神楽"と違う」「ＴＶで観る"夜神楽"と違う」といった感想が寄せられた。

また先の留学生を交えたダンスも宮崎市で２回上演したが、県外での発表同様、「宮崎らしい」と好評であったが、さすがに「"夜神楽"らしい」といった評価はなかった。

(3)高千穂町の上演に対して

中学校の記念式典で作品を鑑賞した教師からは、「自分も夜神楽を舞うが、中学生にさせてみたかったのはこんな“夜神楽”だ」といった感想や、地区の人からの、「“夜神楽”のそれぞれの舞いの感じがよく出ている」といった感想が寄せられた。しかし一部の中学生(*11)の中に、「何をやっているのかわからない」「“夜神楽”の関係者が観たら気を悪くする」「こういうダンスは嫌いだ」といった、前述の神戸の評価と類似する（否定的）感想も見られた。

さらに、高千穂町の一大イベントである天孫降臨（1999.10）に招待され、保存会が演じる夜神楽と同じプログラムの中でも披露したが、夜神楽の特徴的な舞いやラップのリズムに合わせて舞い出す人も現れ、踊り手の学生たちは、これまでで一番楽しい発表だったと感想を述べている。

(4)その他

博多どんたく（1999.5）において、宮崎市のふるさと祭りで流される民謡『サンバいもがらぼくと』に合わせてこの『千年ぐらいは舞（待）ってみようか』を踊ったところ、題名から“高千穂夜神楽より”を削除したにもかかわらず、観客から「宮崎らしい」「やはり宮崎は神楽だ」といった声がかかり、九州内では宮崎＝神楽といったイメージが強いことや、実際は県内各地に神楽があり各々特徴がありながら，その違いまでは知られていない実態を伺い知ることができた。

ところがこのダンスを別府のドリームバル（1999.10）で披露したところ、高千穂出身の女性から、「観た瞬間に夜神楽だと分かった、懐かしかった」といった声がかかり、すでに創作した学生の大半が入れ替わり使用曲や衣装が変わっているにもかかわらず、このように評価されたことに驚くと共に、芸能の舞いやふりの特徴を自分らしく表現・再構築してみるという文化理解(*５)の有効性を確信するに至った。

以上のことから、宮崎の芸能として広く知られている夜神楽を題材にした作品は、特徴的な動きやふりのアレンジと共に、作品の明るさやラップのリズムが、踊り手と共通の地平をもつ高千穂や宮崎市の観客には概して“（村祭りである）夜神楽らしい”と享受され、さらにその明るさやラップのリズムが、県外や宮崎市の踊り手と共通の地平をもたない観客には、“宮崎らしい”と受け止められていることが、その反面自分なりのアレンジや作品の明るさ、ラップのリズムが、神楽やそのイメージにこだわる観客や中学生の“神楽らしくない”といった評価につながったことが明らかになり、以下に示すような、“宮崎らしい表現・創作ダンス”を探る手がかりを得ることができた。

○題材として取り上げる芸能は、広く県内外に知られているものがよい。

○広く県内外に知られている芸能が身近にない場合でも、資料やＶＴＲを利用して丁寧な教材づくりを行えば、題材の芸能のイメージや雰囲気を表現することはできる。

○共通の地平のない観る人に“宮崎らしさ”を伝えるには、今この宮崎に生きている子どもたちが、題材の芸能の特徴を自分らしく表現・再構築するのがよい。

4．各発達段階の実践および発表から見えてきたもの（1）

1998、1999年の2年間にわたり、先の大学生の実践・発表を参考に、宮崎市内の保育園と中学校、近郊の小学校（高岡市）と高等学校（西都市）、延岡市の中学校で、この郷土芸能を題材とした表現・創作ダンスの保育や単元学習を実践した。ただし、芸能の宝庫と称される宮崎県であっても、宮崎市には、広く県内外に知られた芸能がないことから、市内の保育園には、身近な芸能の代わりに、資料や音楽が入手しやすいえびの市の『田の神さあ』の取り組みを勧め、さらにえびの出身の園児の父母からもおもしろい由来や様子を話してもらうことで、子どもたちのイメージを広げた作品づくりへ発展させた。同じく市内の中学校でも、隣接する神社の『島之内神楽』が県内でも余り知られていないことから、校区にあるみやざき歴史文化館で『高千穂夜神楽』を学習してもらい、宮崎の「神楽」を題材とした作品づくりとした。各実践と発表（表現者と共通の地平をもつ観客が多い）について以下に述べる(*12)(*13)。

1).『田の神さあ』を題材とした表現　（保育園、5歳児の表現）

春の農耕の予祝のために踊る『田の神さあ』の写真（石像）を見たり、おもしろい由来を聞いたりして、子どもたちは、想像したり思ったりしたことを絵に書いたり、大きなダンボールで田の神さあを制作したり、またいろいろな田の神さあをまねしたり、動く田の神さあになったりして遊ぶ中で、自分の身体がどれだけ大きくあるいは小さくなれるか、どうしたらおもしろい表情ができるか、どうしたら走ってピタッとあるいは斜めに止まれるか等々、難しい動きに挑戦しながら思い思いに動いて楽しむことができた。

ダンボールで制作した大小の田の神さあを立てた舞台の上で、子どもたちは、走って好きな田の神さあのポーズで止まったり、稲作の動き（種をまく、耕運機を運転する、カラスを追う）やごはんを食べる動きのまねをしたり、『田の神さあ』の曲に似せた保育者のハンドドラムに合わせ、『田の神さあ』の象徴であるシャモジをもって思い思いに踊ったりしたが、石像をまねたダンボールの田の神さあ（大道具）やシャモジ（小道具）を使ったことで、『田の神さあ』だとすぐに分かった観客も多かった。しかし稲作の動きやごはんを食べる表現が日常的すぎて、特に幼児の表現だけでその宮崎らしさ（えびのらしさ）を伝えることは難しいことが分かった。

2).『城攻め踊り』を題材とした表現　（小学校、1・2年生の模倣の運動）

運動会で高学年が踊る「こども城攻め踊り」を観ている低学年の児童は、教師の鉦や太鼓に合わせ、高学年の動きをまねしたり、長くてしなやかな矢旗になって思い思いに動いたり、“攻める”からイメージを広げて表現する中で、全身でお囃子のリズムを楽しみ、身体を投げ出すような大きくてしなやかな動きに挑戦し、次々“攻める”もの（忍者やサッカー選手など）に変身して遊ぶことができた。

発表の最初に、衣装をつけ矢旗を背負った高学年が鉦や太鼓を打ち鳴らしながら「こども城攻め踊り」の出陣の舞を舞ったことで、低学年の児童の身体を投げ出すような動きが矢旗が前後に動く様子を表していることや、そのリズムが『城攻め踊り』のものであることが観る人にもよく伝わった。しかし幼児と同様、思い思いの“攻める－守る”（2人組み）だけでは、その宮崎らしさ（高岡らしさ）を観客に伝えることは難しいことが分かった。

3).「神楽」を題材とした創作ダンス　（中学校、2年生、男女共習、選択ダンス）

神事的性格が強い冬神楽・夜神楽（『高千穂神楽』『椎葉神楽』『米良神楽』）に比べると、春神楽・昼神楽である『島之内神楽』は農耕的性格が強く、速いテンポで左右に動く所作が複雑

で大きい。生徒は、2拍子の調子よいお囃子に合わせ、好きなステップでリズミカルに動いたり、特徴のある動き（剣道の尺とり足や相撲の土俵入り、重心を下げて回る、大きく円を描いて回るなど）を練習する中で、2拍子のリズムが心を浮き立たせることや、所作やふりをおおげさに動いたり、それらの向きを変えて踊ることで、「神楽」らしく見えることを学習した。

発表（クラス）では、神楽の特徴を一応それらしく動いて見せ合ったが、中学生になれば、園児や小学生と異なり、何か宮崎らしいことをやっているといった雰囲気は伝わることが分かった。

4）. 正調『ばんば踊り』を題材とした創作ダンス　（中学校、2年生、男女共習、選択ダンス）

「馬場踊り」や「播州踊り」あるいは“激しい・賑やか”を意味する九州東部の方言「ばんばん」がなまったと言われている『ばんば踊り』は、速いテンポで声高らかに歌われる口説きに合わせて勇壮に踊る盆踊りである。これまでにも運動会などで、「新ばんば踊り」や「サンバばんば」を踊ったことがある生徒らは、まず正調の太鼓や口説きに合わせたリズミカルな動きを楽しんだり、単元の中で保存会の正調『ばんば踊り』を鑑賞し、伝承者の指導で、体の全面で常に両手を回して左右に開くふりや、片足を軸にして180°回転する際の足さばきを練習した。また口説き歌の内容からイメージを広げて小作品を創る中で、簡単なリズム（4拍目にアクセントのある12呼間の動き）をくり返す楽しさや、太鼓と口説きと動きのかけ合いに『ばんば踊り』の妙味があることや、時代の変遷と共に変容してきた踊りの歴史を興味を持って学習した。

発表では、小道具の扇や刀、鎖鎌を使用し、櫓に見立てた肩車の2人組や特徴のある所作、そしてリズムから、正調『ばんば踊り』を知る一部の観客には宮崎らしさ（延岡らしさ）が伝わった。しかしそれ以外の多数の観客は、題名に「ばんば」がなく、また音楽もおとなしい感じの曲（生徒が踊りの由来から広げたイメージに合わせた）を使用したので、このダンスが『ばんば踊り』を題材にしているとは気づいていなかった。

5）.『臼太鼓踊』を題材とした創作ダンス　（高等学校、1年生女子の選択ダンス）

県の代表的な臼太鼓踊である『下水流の臼太鼓踊』は、テンポが速く、動きも活発で洗練されている。古くは稲作が豊穣であるように水神と火の神に祈願する目的で踊るものであったが、近年は豊年感謝を祝って踊られており、激しい跳躍が特徴である。すでに生徒らは西都市内の各小学校で「子ども臼太鼓踊り」を経験しており、そのリズムや動きを思い出して動いたり、グループで激しい感じが次第に鎮められていく様子を表現したり、その由来から簡単なストーリをつくって小作品にまとめたりする中で、回ってジャンプする簡単な動きのくり返しが心を沸きたたせることやだんだん変化していく表現の仕方、そして作品のまとめ方を学習した。

発表では、幟のついた太鼓を使用せずとも、三角形を描く特徴のある足はこびや、前後の送り足、両手の平で胸の太鼓を打つまね、回ってジャンプなどから宮崎らしさ（下水流らしさ）が感じられ、まただんだん激しくなったり弱まったりする群の動きからも踊りの由来等が伝わった。なお、「子ども臼太鼓踊り」の曲に、新たに由来のイメージを加えて編曲した音楽(*14)の効果も大きかった。

以上のことから、広く県内外に知られた郷土芸能を題材にした表現・創作ダンスの成果＝作品の発表が、観客に“宮崎らしい”と評価されるためには、園児や小学生そして中学生では、題材の特徴やイメージを自分らしく表現するだけでなく、取り上げた芸能に使われているある

いは似せた大道具や小道具の使用はもちろん、時にはその芸能をまるごと紹介する部分を組み入れた構成の工夫が必要なことが、対して高校生は、題材の特徴やイメージを自分らしく解釈して表現するだけでも“宮崎らしさ”を伝えることはできるが、音楽はその芸能の曲やそれに近いものを使用する方がよいことなどが明らかになった。また、題名に題材の芸能の名称を入れたり、プロブラムやアナウンスの中で、題材の芸能に関する簡単な情報を与えるなど、観客が予備知識を持てるような配慮も、子どもたちの表現が“宮崎らしい”と共感・評価される一助になることも、観客のアンケート(*15)から明らかになっている。

5．再び“宮崎らしさ”について

第3章で、夜神楽を題材にした作品『千年ぐらいは舞（待）ってみようか』が、県内外の夜神楽の予備知識を持たない観客から、「宮崎らしい」「宮崎の学生らしい」「明るい」と評価されたことを報告したが、それでは何がそのような評価をもたらしたのか。大学生（農学部1年生、40名）を対象に、県内出身者（17名）と県外出身者（23名）の感じている“宮崎らしさ”について簡単なアンケートを行い、外から見た“宮崎らしさ”と内から見た“宮崎らしさ”を探った（表2参照)。なお、複数回答から、頻出度数4以上のものを抽出し比較した（分類は松本らのイメージ用語の分類－日本女子体育連盟紀要'82－を参考にした)。

（表2）外から観た“宮崎らしさ”と内から観た“宮崎らしさ”

	共通（各頻数4以上のもの）	県外	県内
自然現象	1．フェニックス（17） 2．南国（14） 3．高温多雨（11） 4．緑の国（8） 5．鬼の洗濯岩（7） 6．日南海岸（5） 7．幸島の野性猿（4） ＊ 山が多い 亜熱帯植物（各3）	1．台風（11） 2．きれいな海（8） 3．温暖な気候（4） ぬけるような青空（4） 雪が降らない（4） ワシントンパーム（4） 苔が多い（じめじめ）（4） 木崎浜（4） （サーフィンのポイント） ＊ 霧島連山 冬が意外に寒い（各3）	1．サボテン（5） 2．都井岬の野生馬（4） ＊ 花がいっぱい（3）
生活事象	1．シーガイア（8） 2．焼酎（4） ＊ 冷や汁 フラワーフェスタ（各3）	1．サーフィン（19） 2．（巨人の）キャンプ（16） 3．リゾート（11） 4．交通手段が少ない（7） 5．民放が2局（5） 6．日向時間（5） 7．海水浴（4） 地縁・血縁が強い（4） ＊ 車が必需品 物価が安い 醤油が甘い（各3）	1．神話の国（6） ピーマン（6） 3．夜神楽（5） 日向夏（5） 5．農村型（4） スポーツ（4） 西都の古墳群（4） 埴輪（4） ＊ マラソン 地どり こどもの国（各3）
県民性、他	1．明るい（5） てげてげ（中途半端）（5） ＊ 都会へのあこがれ やさしい（各3）	1．のんびり（12） 2．よだきがり（6） ＊ 集団行動が好き おっとり（各3）	1．素朴（12） 2．消極的（6） 楽天的（6） 穏やか（6） 4．九州男児（5）

(1)両者に共通した“宮崎らしさ”

生活事象と比べると自然現象が多い。その内の動物では小学校の国語の教科書で取り上げられた「幸島の野生猿」が、植物では宮崎県のシンボルの「フェニックス」が特に多く続いて「緑の国」が、そして自然（現象）では「南国」「高温多雨」や観光スポットの「鬼の洗濯岩」「日南海岸」が多い。また生活事象の物質では「焼酎」が、人と生活では「シーガイヤ」が多い。一方県民性は、予想していた通り、「明るい」「てげてげ＝中途半端」が多い。

(2)県外者がだけが指摘した“宮崎らしさ”、つまり県内者が余り気づいていない、そして他県（特に出身地）と比べて分かる“宮崎らしさ”。

生活事象が多い。その内のあそび・スポーツでは「サーフィン」「(巨人の）キャンプ」「リゾート地」が、人と生活では「交通手段が少ない」「民放が2局」「日向時間」が多く、自然現象の動物に該当するものはない。植物では「ワシントンパーム」「苔が多い」が、自然（現象）では「台風」「温暖な気候」「雪が降らない」「きれいな海」が多くなっている。また県民性は「のんびり」「よだきがり」が多い。

(3)県内者だけが指摘した、つまり県内者が感じているほど県外者からはそう思われていない“宮崎らしさ”

同じく生活事象が多い。その内の物質では「ピーマン」「日向夏」「埴輪」が、あそび・スポーツでは「神話の国」「スポーツ」「夜神楽」が、人と生活では「農村型」「西都の古墳群」が多く、自然現象の動物では「都井岬の野生馬」が、植物では「サボテン」が多く、自然（現象）は該当するものがない。また県民性は「素朴」が特に多く、「消極的」「楽天的」「穏やか」も多い。その次に多いものが「九州男児」である。

ただしこれらは若者を対象としたものであり、年代が異なればまたそれぞれが感じている“宮崎らしさ”も変わるはずである。しかし並行して実施した県内の教員（約70名）による“宮崎らしい題材”についてのブレイストーミングでは、県の代表的な芸能である『ひえつき節』『いもがらぼくと』『日向のひょっとこ踊り』が新たに加わる程度で、先の県内出身の学生が指摘した“宮崎らしさ”と大差がなかった。

これらの結果から、予想に反し県内の芸能が“宮崎らしい”と思われていないこと、未だに県内外を通じて従来の宮崎県のイメージ（南国みやざき）が強いこと等が分かった。しかし県外の若者の間では、宮崎＝各種スポーツのキャンプ地、サーフィンの穴場といった新たなイメージも定着しはじめている様子も伺えた。一方県民性は、県外では「のんびり」が、県内では「素朴」が多く、「てげてげ」「よだきがり」といった方言も上がっている。これらはおしなべて“温暖な土地柄”から派生したものと思われるが、そこに県内外で一致した「明るい」がプラスされた県民性が、先の“宮崎の学生らしさ”や“明るい作品”といった評価につながったものと推測される。以上のことから、“宮崎らしさ”を引き出すために、敢えて題材に郷土芸能を取り上げるべきなのか、それとも無難に南国みやざきにふさわしい題材を取り上げる方がよいのか、あるいは宮崎の新鮮なイメージを県内にアピールする意味でもスポーツを取り上げた方がよいのか、さらなる検討の必要性を感じた次第である。

6．各発達段階の実践および発表から見えてきたもの（2）

県内の芸能を題材とした先の実践（幼稚園1、小学校1、中学校2、高等学校1）について、ここでは発表につなぐ作品づくりの題材に芸能が適していたか否かを、学習者や指導者の発表後の評価から探ることとする。保育者・指導者の評価は発表後の聞き取り調査を参考にし、同じく学習者の評価も発表後の感想や活動の変化を参考にした。ただし発表は、単元最後のクラス発表会で行った中学校の『島之内神楽』以外は、ムーブメント・アート・インみやざき'98での学外発表である。

1）．『田の神さあ』を題材とした表現　（保育園、5歳児の表現）

発表後の保育者の“何がおもしろかった？”の問いかけに、子どもたちは

「ピタッと止まるときに息も止まったところ」

「倒れそうな田の神さあ」

「いろいろな顔の田の神さあになったところ」

「いろいろなお祭りごっこをしたところ」

と答えており、対して保育者は

○生活の中に感動があってはじめて、幼児たちは伝えたい・表現したいといった思いを抱くことがわかった。

○感動を引き出せる題材として、いろいろな遊びが工夫できる『田の神さあ』は、予想以上に幼児の興味や関心を高めるものであった。

と評価していた。

2）．『城攻め踊り』を題材とした表現　（小学校、1・2年生の模倣の運動）

指導者は

○踊りの由来や動きの意味について、生徒は予想以上に興味を示した。

○楽しそうに動きをまねする内に、次第に自分の好きなふりや気にきった動きを見つけて繰り返せるようになった。

○“攻める”から広がったイメージや表現が、題材の『城攻め踊り』からどんどん離れてしまった。しかしこれが低学年のよさだと捉らえそのまま作品づくりに発展させた。

○『城攻め踊り』の由来から中学年の表現も実践し、合わせて全校作品として発表したが、従来の高学年の「子ども城攻め踊り」だけの発表より父母や地区の人から高く評価された。

と評価した。発表会後、子どもたちは保存会の踊りを熱心に観るようになった（保存会の評価）。この子どもの変化に対し指導者は、

○これまで踊りの由来や動きの意味について取り上げてこなかったことが、高学年の表面的で表情のない踊り方につながっていたことに気づいた。

○この低学年が高学年になった時の「子ども城攻め踊り」か楽しみだ。

と述べている。

3）．「神楽」を題材とした創作ダンス　（中学校、2年生、男女共習のダンス）

指導者は

○神楽の舞いやふりをまねするといった、動きの具体的なめあてがあるので、はじめてダンスを学習する男子にも入りやすい題材であった。

○それらしく動ける小道具（保存会から借用）があるので、友だちと意見を出し合ってその

扱い方を工夫するだけでも楽しい活動であった。

○これまでは時間の制約もあり、「フォークダンス」の中で郷土の芸能（日本の民踊）に取り組むことができなかった。今回イメージ課題として2時間だけでも取り組むことができてよかった。

と評価した。一方生徒の中にはわざわざ隣接する島之内神社の元旦祭（深夜）に出かけ、神楽が舞われる様子を写真に撮り指導者に見せたり、近くのみやざき歴史文化館に出かけたりといった活動が現われ、このような成果に対し指導者は、

○島之内神社の神楽を題材に取り上げたことがきっかけになり自文化に興味や関心をもつようになってうれしかった。

と述べている。

4）. 正調『ばんば踊り』を題材とした創作ダンス （中学校、2年生、男女共習、選択ダンス）

生徒の発表会終了後の学習カードには

○選択のダンスを選んでよかったことは、みんなで一つの作品を創り上げ発表したことです。

といった評価が見られ、指導者も、

○身近な郷土の芸能でありながら知らないことばかりで、教材研究を通して自分自身が勉強できた。また保存会の指導も参考になった。

○「新ばんば」「サンバばんば」「ソーランばんば」がある中で中学生が正調の踊りに興味をもったことに驚いた。

と評価する一方、

○生徒は聞き慣れた『ばんば踊り』のリズムがどうしても崩せずに、リズムに捕われ過ぎてリズムを楽しめなかった。

○イメージ課題の題材として『ばんば踊り』を取り上げたことは作品づくりを容易にしたが、作品に仕上がった時点では、イメージを膨らませすぎて『ばんば踊り』から離れたものになってしまった。

と反省し、発表では題材の芸能らしさをどこまで残すべきだったのか疑問を投げかけた。

5）.『臼太鼓踊』を題材とした創作ダンス （高等学校、1年生女子の選択ダンス）

指導者は、

○郷土の芸能というのは、保存会に頼るか、自分が出かけて行って覚えなくてはできないと思い込んで敬遠してきた（*16)が、創作ダンスの中でイメージ課題として取り組む方法は大変やりやすかった。

○学習に使用する資料やＶＴＲの収集は意外と簡単だった。実は保存会からこんなに簡単に借りられるとは思っていなかった。

○「創作ダンス」の目的である一人一人の個性を大事にしながら、同時に内容「フォークダンス」の目的である自文化理解についても踏み込むことができてよかった。

と評価した。一方生徒は、

○小学生の時に踊ったことがある「子ども臼太鼓踊り」から入ったので動き出しやすく、これまでと比べると創作ダンスに対する抵抗感が少なかった。

○創作・発表では、イメージ課題から見つけたひと流れの動き（炎や水の流れがだんだん強くなり、また弱まっていく様子）を生かすことができた。

と感想を述べている。

以上のことから、“宮崎らしい表現・ダンス”を引き出す題材として最適かどうかは別として、身近な芸能を題材にした表現・創作ダンスの学習とその成果の発表が、題材の芸能に対する学習者の興味や関心を高め、内容「フォークダンス」の目的の一つである自文化理解にもつながること等が明らかになった。改めて、平成13年度に公開する“宮崎らしい表現・創作ダンス”の題材の一つに取り上げることを提案したい。

7．まとめに代えて

主催者の一人として、この８月（2000年）に開催した宮崎県女子体育研究大会で、参加者（保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特殊教育の指導者、約70名）に、今年度のムーブメント・アート・インみやざき（第14回宮崎県表現・創作ダンス発表会）について、

○発表作品を、次年度の公開演技（宮崎らしい表現・創作ダンス）につなぎたいこと

○そのためには、２学期の保育や表現、創作ダンスの単元学習の中で、“宮崎らしい”題材を取り上げて欲しいこと

○“宮崎らしい”題材の一つに、広く県内外に知られている芸能があること

○身近にそのような芸能がない場合でも、資料やＶＴＲから丁寧なあそびづくり、教材づくりをすればよいこと

○取り上げる芸能の舞いやふりをまねする（覚える）といった動きの具体的なめあてがあるので、初心者には入りやすいイメージ課題であること

◎取り上げる芸能の由来や歴史、あるいは特徴のある動きの意味からイメージを広げて表現する“自分たちの動きづくり”は、遠い祖先たちの伝統を動作で表現することであり、自分と未知の人を結ぶ絆を見い出すこと(*17)であること

○できれば、取り上げる芸能の持ち物や音楽を使用すると、子どもたちの表現の“宮崎らしさ”が観る人により伝わること

○このような取り組みに対して、保存会は予想以上に協力的であり、子どもたちの芸能に対する関心が高まることを喜んでくれること（すでに学校教育での取り組みに“伝承”までは求めたり期待したりしていないこと）

○作品づくりでは、芸能を題材にした表現や創作ダンスだけではなく、南国宮崎の自然や生活を題材にしてもよいこと

◎（なぜならば）題材が何であろうと、子どもたちの周囲の見慣れたものから、“新しい物”や“美しいもの”を見い出して、本当によく観てその通りに動けば、それが今この時間を生きている子どもたちの“宮崎らしい表現・ダンス”になるはずであるから

等を説明すると共に、

◎この郷土の芸能を題材にした表現・創作ダンスの学習が、“伝承”への入り口は異なるが、内容「フォークダンス（日本の民踊を含む）」の一つの学習になること

◎今回の実践は、「表現・創作ダンス」かそれとも「フォークダンス」かといった内容選択ではない、内容「表現・創作ダンス」が内容「フォークダンス」に乗り入れた（ある意味では「フォークダンス」が「表現・創作ダンス」に乗り入れた）試みであること

◎その背景には、それぞれの文化をどちらも体験させたいといった願いがあり、学際的な学問が重視され教科の枠までが取り除かれる現在、何ら不思議ではない（はずである）こと

等についても、これまでの成果と併せて報告し（◎印は、特に丁寧に説明したこと）、発表作品を募集した。

平成13年２月に開催されるムーブメント・アート・インみやざき（第14回宮崎県表現・創作ダンス発表会）にどのような作品が発表されるのか、その前に、県内の何人の指導者がこれまでの成果に賛同し、公開演技につながるような表現・創作ダンスの保育・授業づくりに取り組んでくれるのか。あるいは、公開演技で関係者が期待するような“宮崎らしい表現・ダンス”を発表できるのか。今後の立案に際し、これまでの一連の研究と今回の総括が少しでも役立つことを信じ、併せて今回の報告が、指導者とその向こうにいる宮崎の子どもたちへの間接的な指導になることを願っている。

最後に、“（自分）らしく”という言葉は、表現や創作ダンスの学習で頻繁に使用する指導言語である。しかし（自分）らしさが何なのか、（自分）らしく表現するにはどうすればよいのかを具体的に指導できる教師は少ない。研究者一同、この４年間、宮崎の子どもたち（幼児から大学生まで）にしかできない表現を引き出すことをめざしてきたが、実際に子どもたちと表現を通して触れあう中で、子どもたちそれぞれがよく観たり感じたりしたことをその通りに動くことが、まさに個性的で“（自分）らしい”表現になることに気づかされた。また郷土の芸能を含め、子どもたちがよく観たり感じたりできるよう、子どもたちの周囲に題材を求めるならば、それが必然的に“宮崎らしい”表現につながることも実践・実証した。本研究の成果とも言える“宮崎らしい”公開演技が全国から宮崎に訪れる指導者にどのように評価されるか、結果を楽しみにしたい。

（2000年9月30日受理）

注および引用・参考文献

*1 平成９年度～10年度科学研究補助金を得て実施した基盤研究「表現運動・ダンス領域における学習材としての 郷土芸能の可能性を探る」と同じく平成11年度～12年度科学研究補助金を得て実施した「続・表現運動、ダンス領域における学習材としての郷土芸能の可能性を探る」

*2 岩田靖「郷土芸能と創作についての教授学的思考」、*３の⑤より引用

*3 ①高橋るみ子「事例研究ー郷土の民踊・芸能の学習方法を探る」宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要、第５号、1993.3

②高橋るみ子、他「郷土芸能を題材とした表現・創作ダンスの学習」宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要、第６号、1999.3

③高橋るみ子、他「表現運動とフォークダンス（日本の民踊）の学習」宮崎大学教育学部紀要、第58号、1998.3

④佐々木昌代、他「地域と学校教育をつなぐ郷土芸能の可能性を探るー宮崎県の場合」宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要、第４号、1999.3

⑤高橋るみ子、他「表現運動・ダンス領域における学習材としての郷土芸能の可能性を探る」平成９～10年度科学研究費補助金（基盤研究）研究成果報告書、1999.3

⑥高橋るみ子、他「郷土芸能（民踊）と表現運動・ダンス学習－宮崎県の実践を手がかりに」宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要、第７号、2000.3

⑦有馬早苗、他「郷土芸能を学集材とした創作ダンスの授業について」九州スポーツ学会、第49回大会号、2000.9

*4 松本千代栄「舞踊教育にあたって」学習研究、第２巻第７号、1947

*5 *３の③、および⑥より引用

*6 1978年の共同研究のテーマは「学習内容の細分化と動きの引き出し方」、またこの1981～83の研究の成果が、『表現の世界』（松本千代栄、大修館書店）に多数報告されている。

*7 松本千代栄「表現の構造と機能」ダンスの教育学１、徳間書店、1992

*8 高橋るみ子、他「宮崎のこどもと表現運動（その１）－高千穂のこどもと神楽－」宮崎大学教育学部紀要、第72号、1992

*9 *3の②より引用

*10 1994に始まった「留学生と日本人の友好と友情の輪を拡げるつどい」（後援：外務省、文部省、国際交流基金・東京都）に、宮崎大学が留学生動員協力校の一つとして参加要請を受けたことから、急遽、メンバーに留学生13名を加えて参加した。もし夜神楽を題材にした創作ダンスでなければ、７ヵ国の留学生が、わずか５回の練習で宮崎の芸能を披露することは不可能であった。

*11 実際に観たり踊ったりしたことがありながら、アンケートでは興味や関心がないと回答した生徒が多い中で、夜神楽について興味や関心があると回答した生徒、アンケートの詳細は*3の①に記載

*12 各実践の詳細および保育案・指導案については、*3の②で報告

*13 これらの作品を「ムーブメント・アート・インみやざき1999」（第12回宮崎県表現・創作ダンス発表会）で発表した。

*14 実践で使用した音楽は、第１回全国高校大学ダンスフェスティバル（1988）の参加発表部門で発表した『子ども臼太鼓踊り』の音楽用に、高橋がアレンジし、エレクトーンの生演奏（依頼）を収録したものである。

*15 プログラムに添付したアンケートの自由記述より分析

*16 このような郷土芸能の学習に対する思い込みが、体育科における取り組みの減少の原因の一つになっていることは、*3の③、および⑥で報告している。

*17 Joan Lawson著、森下はるみ訳、フォークダンス、現代舞踊学双書５、大修館書店、1975